CETの場合、その主宰者がデザイナーやディレクターや建築家といった、地元の人でもなければまちづくりを強く意識する人でもなく、アートや建築、文化といった立場からの実験的な性格が強い運動体であるので、完全に地元に合ったイベントに作り変えていくことは難しいが、このイベントでこの地域に何か新しいものが芽吹いたのは確かだ。それを地域の活性化につなげていくためには、真に地元を巻き込み、続けていくことが重要である。

国連アジア本部設置による沖縄の可能性
—国連機関沖縄誘致推進センターの事例から

中　尾　安寿水

本論文は、現在政治家やNPO法人などが提唱している国連アジア本部沖縄設置における、沖縄の今後の可能性を考察する。

なぜアジア本部を設置する場所として沖縄が挙げられるのだろうか。それは、古くは琉球王国時代としての独立国家時代から、その後の薩摩藩の島津氏による侵略、明治政府による「琉球処分」、太平洋戦争において日本で唯一の地上戦となり、約二十万人もの被害を出した沖縄戦、そして、二十七年間に及ぶ米軍の統治という、様々な歴史の流れの中で芽生え、深く沖縄の人々の心に刻まれた平和を求める想いが、今後の世界の平和構築を担っていくであろう国連にふさわしいからであると言える。また、同じく強い平和の心をもつであろう被爆地である広島・長崎ではなく、なぜ沖縄なのかという点については、沖縄には現在でも根強く残る様々な問題があるからであると言えるだろう。沖縄県人の平均所得は一九七二年の日本復帰後から常に最下位である。これには辺境の地であり海によって隔離された場所であるゆえに、産業が発達しなかたことによる経済発展の遅れが見られる。また、今でも残る米軍基地により、基地で働き収入を得ている人、基地による地代で生活をしている人など、基地があるからゆえの依存経済の問題がある。よって、現在沖縄では、基地を反対する声は多いものの、基地がなくなることで生活できなくなる人々がいることも事実である。この問題を解決する様々な政策や運動の中のひとつに、冒頭で述べた「沖縄にアジア太平洋国連本部を」という動きがある。

本論文では特にNPO法人国連機関沖縄誘致推進センターの活動に焦点を当て、団体の発起人である中谷靖氏の発言を参考にしながら、国連アジア本部の沖縄誘致の可能性について探っていった。

福都市生活における地下鉄の経験—小説を通じてみる東京の地下鉄

永　瀬　智　子

普段われわれが何気なく乗っている地下鉄であるが、その何気なさの中に不思議なことはたくさん転がっている。たとえば、電車の乗り間違えに代表される方向感覚の喪失であったり、乗換の仕方が駅環境に影響されたりなど、無意識のうちに我々が地下鉄に乗りながら経験していることは、地下鉄や地下空間特有のものによるためであると思われる。しかしこれ以上に、人間に不可思議な感覚を持たせたり、何かを想像させたりする要素がもっとあるのではないかと思い、それを探ることを卒業論文のテーマとした。

その上での主な分析の対象とするものは、アンケートではなく、もっと感覚的に訴えてくるものとして一冊の小説を選んだ。浅田次郎の『地下鉄（メトロ）に乗って』である。この小説では地下鉄という装置、そして地下という空間によって、登場人物が過去と現在を行ったり来たりする。現実では考えられないタイムスリップ、そしてワープであるが、作者がこのような

役割を地下鉄に持たせたのは、地下鉄の持つ特有の性質、「真っ暗で外界（移動経緯）が見えないこと」、「方向感覚を失いやすいこと」、そして地下空間の性質「コンクリートで固められていて、地上が見えないこと」、そして乗換のできる便利な駅にしようとしたためにできあがってしまった複雑な駅構造、という要素があるからである。これらの要素を使って小説を違和感なく読者に読ませようとするということは、万人の中に共通して潜んでいる、地下鉄に対するある感覚や印象があると浅田自身が考えているからである。そこに目をつけ、人間の地下鉄に対するイメージを代表するものとして、私はこの小説を選んだ。

実際に分析する中で、東京という大都市特有の複雑な路線網が与える影響、それを受けて人間がどのように考え動くか、また地上と遮断された地下の中で人がなにを感じうるかということが徐々に見えてきた。しかし、現代の情報化社会の中で地下鉄の乗換を考えたとき、さらに地下鉄と地理というものはリンクしにくくなる。となると地下鉄に対する不思議な感覚はデジタルを使って解決されていくものになるのであろうか、というと、それは必ずしもそうではないと私は考える。パソコンや携帯電話の画面からは得ることのできない地下鉄の乗車や地下空間での経験は、これから先も地下鉄がある限り人間の中からなくなるものではない。逆にこれから時代に合わせて変わりうる地下鉄の環境自体も、さらに何か新しい、これまでとは違った感覚を与えてくれる能性があると私は思っている。

グリーンツーリズムとまちおこし
—高知県四万十市西土佐を事例に—

西　山　雅　子

近年、農山漁村での滞在型余暇活動であるグリーンツーリズムが注目をあびている。以前のマスツーリズムによる環境破壊の反省や農山漁村の過疎化・雇用問題などいくつかの条件が重なり、1970年代ヨーロッパで広がった。その後1992年、農林水産省が「グリーンツーリズムの提唱——農山漁村で楽しむゆとりある休暇を」という中間報告書を提言したことから日本でも本格的に取り組まれ、現在では全国各地に普及するに至った。中間報告書においてグリーンツーリズムは「緑豊かな農村地域において、その自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動」と定義される。

グリーンツーリズムは都市住民にとって「ゆとりある休暇」を提供するのみではなく、農山漁村の環境保全や農山漁村地域における経済的・社会的効果をもたらし、農山村地域にとっての地域活性化政策となるのだが、現在日本のグリーンツーリズムは特に後者の効果に期待するものが大きい。

高知県四万十市西土佐は、2004年構造改革特別特区として「グリーンツーリズム特区」に認定され、役場を中心にグリーンツーリズムによる地域活性化が図られるようになった。しかし、地域住民にとってグリーンツーリズムはなじみ深いものではなく、決して順調に進められたわけではなかった。そこで、地域住民が地域の魅力を認識・再認識し、何ができるか、何が必要かを考えることからはじめた。まだ、地域住民が自主的に参加するためのきっかけづくりの段階であり、今後、この動きが発展し、地域住民に広がるかどうかに西土佐の将来はかかっているだろう。

西土佐には、外から定住した人々がいる。西土佐に魅了され住みついたのである。現在、西土佐でグリーンツーリズムの取り組みに参加している。「外から見た西土佐」をもっともよく知る彼らが、新たな視点から西土佐の活性化を考え、地域住民と共に取り組むことができれば、西土佐は元気を取り戻していくであろう。まだまだ西土佐のグリーンツーリズムははじまったばかりである。しかし、彼らの「地域活性化させたい」と強く語り、地域・地域住民と関わっていく姿から西土佐のグリーンツーリズムの可